

落成した。これは明治時代に及び、横浜裁判所および神奈川県庁として、明治十五年まで引き続いて使用される。

明治三年（一八七〇）には本町三丁目、横浜為替会社（のちの第二国立銀行）と横浜商社の建物が、二階建て洋館として落成した。この建物は十二月の大火によって焼失したが、翌四年にはさらに堅固な石造の洋館として再建された。明治五年には木造であるが二階建て漆喰塗の横浜電信局が落成し、また横浜停車場が石造の壮麗な外観を呈してあらわれ、一八七四年には横浜郵便局が外国郵便の取扱局にふさわしく、モダンな姿を見せたのであった。

同じく一八七四年には本町一丁目に横浜町会所が完成した。石造二階建ての純洋式建築であり、正面中央には四階建ての塔を配し、大時計をつけたので、時計台と呼ばれて親しまれた。もちろん横浜における最大の洋館であった。しかし一九〇六（明治三十九）年十一月に類焼し、その跡には大正に及んで横浜開港記念会館が建てられた。

ホテルと洋風旅館

横浜には外人のためのホテルも建てられた。ホテル経営の最も古いものは、海岸五番の地に建てられた横濱をおとずれる同国人の宿泊にも供した。慶応二年（一八六六）の「豚屋火事」にも類焼をまぬがれたから、その後は五番クラブとして、各人のために開放され、実質上のホテルとなった。

やがて明治二年（一八六九）、五番クラブは、その名もクラブ・ホテルと改められ、英人ヴァン・ビューレンが経営するようになった。このホテルは関東大震災まで営業をつづけ、その後は山下町に再建されて昭和五年に及んだ。さて明治の世になると、居留地には幾つかの小規模なホテルが開業しているが、六年九月には海岸二十番にグラント・ホテルが新築され、営業を開始する。

グラント・ホテルは、その名にふさわしく広大な洋風建築であって、広告（『横浜毎日』に掲載）によれば「諸事歐洲の例に倣

ひ、家具美麗を尽し、万器清潔を極め、……食事は常食、非常食の両種に別ち、……非常食は四人より百人に至るまで、御談ひ次第急速出来仕候」という次第であった。まさしくミナト横浜を代表するホテルとして登場したのである。なお同ホテルは大震災で焼失したが、一九二八（昭和三年）には海岸通り十番の地に、ホテル・ニューグランドが開業した。

ところで居留地の外人のなかには、東海道を西へ下って、箱根のあたりまで足を伸ばす者も少なくなかった。富士登山のためにも、箱根を越えねばならない。また箱根は、外人には珍しい温泉郷であった。こうした外人の宿泊に供するため、洋風のホテル建築を考えたのが、湯本村の福住九蔵（正兄）である。福住は一八七四（明治七年）、出入りの棟梁を伴って、横浜や東京におもむき、さまざまの洋風建築を見てまわった。

一八七七年五月、湯本村には外観に洋風を取り入れた福住旅館が出現した。その構造は、左右に三階建ての建物を並べ、それを二階建ての建物で結んでいる。まさしく横浜停車場と同じような外観を呈していた。ただし横浜停車場は左右が二階建て（中央は一階）であったが、福住旅館はその上に小さな三階を設けた。これは東京の第一国立銀行を模したものと思われる。二階までは石造（木骨石張）であり、三階は木造漆喰塗であった。

室内は和風にしつらえられた。しかし窓は細長い洋風であり、窓の扉をあげれば、外側には鉄の洋風グリルがつけられた。階級はラセン状を呈し、その上部には彎曲した手摺てすがつく。この手摺りも、これを支える小柱も、洋風であった。階段の天井には、丸い木彫りの装飾がほどこされた。これも洋風の発想であったが、図案は和風（木に飛鶴の図）であった。福住旅館の全体は、いわば和洋折衷となっていたわけである。

福住につづいて一八七八（明治十一年）年に開業したのが、宮ノ下の富士屋ホテルであった。これを建てた山口仙之助は横浜の出身で、明治四年には米国に渡り、三年間にわたって海外の事情を学んだ。帰国の後は慶応義塾に入学、福沢諭吉の勧めによ

り、実業界に身を投ずるに至る。ここで思いついたのが、外人専門の旅館経営であった。一八七七年、箱根の宮ノ下において藤屋旅館を買収し、横浜から職人を招いて三階建ての洋館をつくる。そして翌年、富士屋ホテルと改称して開業した。外人の間に最もよく知られている富士山にちなんで命名したのであった。

宮ノ下には、明治以前から藤屋のほか数軒の宿屋があった。そのうち外人の利用が多かったのは、奈良屋である。新しく開業した富士屋は、旧来の奈良屋と競争し、奈良屋が純日本風の宿屋であったのに対して、洋風の建築に洋風の設備をほどこし、洋式の経営によって、しだいに外人の人気をあつめていった。パンや肉類は横浜から取り寄せた。

しかし富士屋は一八八三（明治十六）年十二月、宮ノ下の大火によって全焼する。すべてを失った山口は、血のにじむ苦悶の末、翌八四年に洋館を再建し、その後は年ごとに新館を増築して、後年の繁栄に至るのである。

四 文明ことはじめ

十全医院の開設 欧米に発達した近代文化は、まず横浜に伝えられ、ついで首都の東京に及ぶ。文明開化の「ことはじめ」は、おおむね横浜に発した、と称しても過言ではない。西洋医学による治療も、イギリス人によって居留

地のなかで行われていた。ただし、これは外人を対象としたものである。日本人に対して治療をほどこしたのは、宣教師としても活躍したヘボンであった。

明治元年閏四月、戊辰戦争で負傷した政府軍の兵士を治療するため、洲干弁天にあった語学所を仮病院として開いた。これは横浜病院と呼ばれ、主としてイギリス人の医師ウイリスが外科治療をほどこした。当時の新聞には「其疵の重き者は、コロロ

ホルムと云ふ麻薬を用ひて裁断術を行ふ。……当人は勿論傍觀の者に至るまで、驚嘆せずといふ事無し」と記している（『中外新聞』明治元年六月三日付）。しかし、この病院も七月二十日には東京の下谷に移された。

市民のための病院が開かれたのは、明治四年（一八七二）のことである。県権令の大江卓は本格的な病院の設立をめざし、市内の資産家に建設費の寄付を求めたところ、たちまち金六千円余を集めることができた。これより野毛山上に病院の建設を始める。その落成まで、仮病院が元弁天（現在 中区北仲通）に設けられ、九月一日から治療を始めた。

時に東京の大学南校（のちの東大医学部）では米人医師 D・B・シモンズを招（しょう）聘（へい）していたが、神奈川県は改めてシモンズを招き、週一回の治療に当たらせることにした。仮病院とはいえ、最初の県立病院であった。

やがて野毛の病院も建設が完成し、一八七三（明治〇）年十二月一日には開業される。それまでの仮病院も移転し、ここに本格的な病院として診療を開始した。病院は内院（入院患者用）と外局（外来患者用）とに分けられ、入院費や診療費も公示された。さらに「払方（はらいかた）なりがたき貧民は、無代にて一広室に置」き、寄付金によって施用することも示達されている。すでにシモンズも専任の医師として県当局に招聘され、連日の診療に当たっていた。

明治七年二月、野毛山の病院は「十全医院」と命名され、県が経営する公立病院として、日ごとに名声を高めていった。シモンズに対する信頼も厚かった。当時の新聞も、シモンズについて次のように記している。

医師は亜米（アメリ）加人（カ）ニシテ晒（シモンズ）門士（ト）云 此人日本ニ居住スルヤ年既ニ久シ 故ニ能ク風儀ニ習慣シ 病者ニ対スル至テ懇切ナリ 加之（カ）ス諸病ヲ治スル其奏功挙テ云フヘカラズ殊ニ梅毒勞瘵及ヒ眼病等ヲ治スルコト極メテ巧ニシテ又外科ニ妙ヲ得タリ

（『横浜毎日新聞』明治七年四月十八日付）

こうしてシモンズは一八八〇（明治十三年）、辞職して帰国するまで、治療に誠意を尽くした。のち再び来日、一八八九（明

治二十二年二月に死去して東京の青山墓地に葬られた。シモンズは、また「セメンズ」とも呼ばれた。虫下し薬として普及した「セメン円」は、セメンズ、すなわちシモンズの医方を伝えたものである。

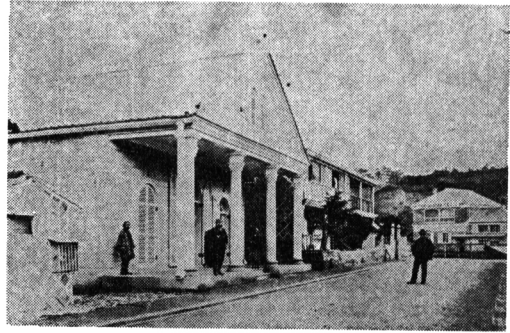
十全医院は一八七八（明治十二）年から往診も始めた。そして創立以来、県が管理したが、一八九一（明治二十四）年四月には横浜市の経営に移される。この後は市立病院（戦後は市立大学病院）として今日に至った。

横浜ゲーター座

横浜居留地のなかでは、幕末の文久年間から、在住の外人のために、外人による芝居や音楽会が開かれていた。旅興行の一座が来演することもあれば、在住のアマチュア仲間が演技を競うこともあった。元治元年（一八六四）には、米国からリズリーのサーカス団が二か月にわたって公演している。これは日本において興行された最初の外国サーカス団である。当時は「中天竺舶来かるわき軽業」と呼ばれ、外人ばかりでなく日本人も多数つめかけた。その情況は錦絵にも描かれている。

芝居や音楽会は開かれても、専用の劇場はなかった。多くは居留地のなかの空倉庫あきなどを利用したものであろう。サーカスは空地にテントを張って行われた。やがて明治の世となり、居留民の数も増加するにしたがって、劇場の開設を望む声も強くなった。こうした要望にこたえて、明治三年（一八七〇）秋、本町通六八番（現在 中区山下町六八番地）に、オランダ人 N・ヘフトの建てたのが、ゲーター座であった。

ゲーター座の原名は The Gaiety Theatre である。すなわち娯楽の劇場という意味をもっており、のちの有楽座（東京）や喜楽座（横浜）という命名と共通している。もちろんフランスやイギリスに、この名称をもった有名な劇場があり、横浜の劇場も、それにならって名づけられたのであった。正しい発音は「ゲイェティ」であろうが、横浜の人びとはゲーター座と呼び、その名によって親しまれた。



ゲーター座 (1870年)

徳川黎明会蔵

よる照明も設備された。

盛況をつづけたパブリック・ホールも、やがて一八八〇年代になると、規模の小さいことが痛感されるに至った。そこで新しい劇場の建設が計画される。資金難のために計画はしばしば頓座とんざしたが、ようやく一八八五(明治十八)年、山手居留地の二五六番・二五七番の地(現在 中区山手町二五四番地)に、新しいパブリック・ホールが完成し、四月十八日、アマチュア管絃楽団の演奏会によって開場した。地上二階、地下一階の煉瓦造、建坪は二百七十坪(約八百九十一平方 m^2)であった。

山手パブリック・ホールが開かれた後も、旧ゲーター座も公会堂として、なおしばらくの間は運営されていた。しかし、数

さてゲーター座は、明治三年閏十月十四日(一八七〇年十二月六日)に開場した。出演したのは横浜のアマチュア劇団である。これよりゲーター座は、アマチュア劇団のために提供され、居留地の重要な施設となってゆく。劇場は石造の平屋で、建坪百二十五坪(約四百十三平方 m^2)、二百人ほどは収容することができたという。

ゲーター座を管理、経営したのはアマチュア劇団であったが、明治五年(一八七二)の秋、劇団は財政困難におちいって解散してしまった。そのままに放置すれば、せっかくの劇場も閉鎖され、倉庫などに転用されてしまうであろう。そこで居住地の有志は集会を開き、この後は公会堂として運用してゆくことに意見が一致した。居留地から出資者をつのり、委員会をつくって運営に当たる、という方式が採用された。

こうしてゲーター座は、明治五年(一八七二)末から公会堂「Public Hall」として運営されてゆく。演劇や音楽会のほか、各種の催物にも利用された。いち早くガス燈に

年後には倉庫に転用される。所有者のヘフトは一八九四年に死去し、のち建物は競売に付されたが、なお倉庫として一九三三（大正十二）年の大震災に焼失するまで使用がつけられた。

山手パブリック・ホールは、一九〇八（明治四十二）年から、新しく設立された会社によって運営されることになり、十月には改めて「ゲーター座」と名づけられた。商業劇場にふさわしい改築が行われた。ここに「ゲーター座」は名実ともに復活し、横浜における特異な劇場として、さまざまな新しい演劇や音楽、のちには映画まで上演・上映しながら、一九三三（大正十二）年の大震災まで、活動をつづけたのである。

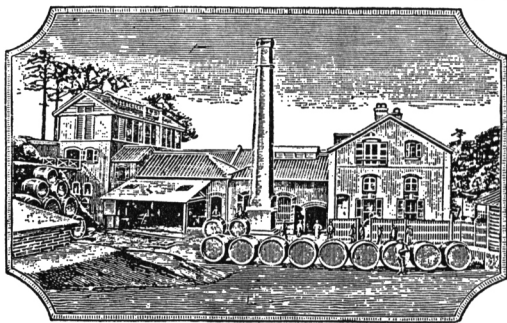
ビール醸造の開始

オランダ人ヘフトは貿易商として、一八六〇年代の初めごろ（文久年間）に横浜に来て、住みついた。商社を經營するかたわら、ゲーター座を設立したが、別に山手六八番においてビールの醸造も試みている。その年代は明らかでない。

わが国においてビール醸造が始められたのは、横浜の山手居留地であった。ゲーター座の歴史に詳しい升本匡彦氏は、ビール醸造についても各種の資料にもとづいて、旧来の説を訂正している。その推定によれば、最も早く開かれたのは、おそらく山手四八番における Japan Brewery であった。開設は明治二年（一八六九）ごろで、ドイツ系の米人 E・ヴィーガンツ Wiegand が支配人となった。やがてヴィーガンツは、新しく開かれたヘフトの醸造所に移って、その支配人となる。ヘフトのビールは明治四年（一八七二）六月には、長崎で売り出されているから、開設は同年、またはその以前であることは確実である。

しかしヘフト醸造所は、一八七五（明治八）年前半に廃業し、そのあとにヴィーガンツみずから經營する、ババリア・ブルーワリ Bavaria Brewery が設けられた。

さうして山手二二三番には、明治五年（一八七二）ごろ、米人コープラントが經營するスプリング、バレー・ブルーワリ Spring



横浜山手のジャパン・ブルワリー工場 (1885年)

『麒麟麦酒株式会社五十年史』から

Valley Brewery が開かれていた。コーブランドとウィーガントと、二つのビール醸造所は数年にわたって並立していたが、一八七六(明治九)年六月、両者はスプリング・バレーの名のもとに合同する。独占による利益の増大をはかったものであった。

しかし三年あまり後、両者は感情の阻隔によって合同が破れ、一八八〇(明治十三)年からコーブランドの単独経営となる。醸造所の主力も一二三番に移り、かつてヘフトの経営した六八番の醸造所では、明治十年代の初めから生産を中止していた。

いまや横浜におけるビール醸造を独占したコーブランドは、順調に販路を拡大していったが、技術者の出身であったから、やがて経理に失敗したのであろう。一八八四(明治十七)年には、ついに倒産してしまった。その醸造所も買却に付された。

ここに在留外人の有志が集まり、新しい会社を設立して、コーブランドの事業を継承することが計画される。各地に在留する外人から出資を求め、さらに一部を日本の政財界から出資を仰いで、一八八五(明治十八)年九月には新会社の設立を決定した。社名は「ジャパン・ブルワリー・コンパニー Japan Brewery Company」と名づけられた。日本名は「日本醸造会社」と称している。

ビールの醸造は、ドイツから教師を招き、一八八八(明治二十一年)から始められた。製品は、一八八六(明治十九)年に磯野計が横浜の北仲通りに開いた個人商店「明治屋」から発売された。新しいビールの名称は、三菱の荘田平五郎の発案によって、東洋のビールにふさわしく「麒麟ビール」と定められた。明治屋は一八八八(明治二十一年)五月、ジャパン・ブルワリーと一手販売の契約を結び、新聞紙上に大きく麒麟ビールの発売広告を掲げたのであった。明治屋が主体となってジャパン・ブ

ルーワリを買取し、麒麟麦酒株式会社が設立されるのは、一九〇七（明治四十）年二月のことである。

第四節 廃仏と神道の再編

一 神仏分離の実情

鶴岡八幡宮

明治維新の前、すなわち江戸時代の末まで、多くの神社と寺院は同じ境内のなかにあり、神も仏もいっしょに祀られ、参詣者は区別することなく礼拝していた。いわゆる神仏習合の形態であった。神社の祭神であつて仏名を称し、あるいは本地垂迹の思想にもとづいて、本地である如来（仏）を設定しているものも少なくなかった。

たとえば八幡宮の祭神は八幡大菩薩と仏号を称し、また本地を阿弥陀如来としていた。いま鎌倉の鶴岡八幡宮に参拝する者は明治元年（一八六八）まで、その境内に多数の寺院があり、仏式の行事が営まれていた事実を、想像することもできないであろう。かつて鶴岡八幡宮は、神社であると同時に寺院であり、むしろ仏教の霊場としての色彩が強かったのである。

参道を進んで鳥居（三の鳥居）をくぐり、神橋に達すれば、その右に放生池があり、弁才天祠が建てられていた（いまは再興されている）。仁王門には鶴岡山の額を、ついで桜門には八幡宮寺の額を掲げていた。さらに境内には護摩堂・経蔵・多宝塔（大塔）・鐘楼・薬師堂など、仏教の堂塔が立ち並ぶ。そこから下宮四社をへて石段を上り、上宮三座に至る。

上下の両宮をはじめ、もろもろの祭神は、それぞれ本地仏を有していた。上宮三座の中央（応神天皇）は阿弥陀如来、東（神功皇后）は聖観音菩薩、西（如大神）は勢至菩薩であった。また下宮の中央（仁徳天皇）は十一面観音であった。しかも上宮の神体は石の僧形像であり、下宮の神体は木の僧形像だったのである。

社内では読経の音が絶えることなく、神事を掌るのも供僧が主となり、十二か院を数えて、新義真言宗に属していた。その下に神主があり、小別当・社僧・社人などの諸職があった。八幡宮だけでなく、多くの神社において、支配権をにぎっていたのは僧侶であり、神官はその指揮を受けていたのである。

ところが慶応四年（明治元年 一八六八）三月には、神仏の混淆が禁止、ついで「神社において僧形にて別当あるいは社僧」と称してきた者は復飾（還俗）を命ぜられ、さらに「仏像をもって神体と」してきた神社は、仏像や仏具の類を取り除くよう達せられた。神仏分離の政策が、新政府によって強く押し出されてきたのである。

これを受けて八幡宮では、十二か院の供僧をはじめ、社僧のことごとくが復飾した。僧侶たちが還俗して、神官となったのである。ところが八幡宮には、鎌倉時代このかた大伴氏が神主となっていた。その地位は供僧より下であったから、還俗した供僧たちは、あらたに総神主という名称を考え出し、神主の上に立った。つまり八幡宮では、総神主が十二人、神主が一人、という奇妙な構成になった。下位の僧職も、小別当が大称宜おおねぎというように、それぞれ神職としての名称に変わった。

社内の由緒ある堂塔も、つぎつぎに破壊された。梵鐘は三代將軍家光の寄進した名鐘であったが、鉄槌で打ち砕かれた。仏像や仏具もすべて取り払われ、古物商の手に移った。こうして明治三（一八七〇）年五月までに、八幡宮からは仏教の色彩がまったく除かれ、今日のような姿になったのである。

阿夫利神社

大山に鎮座する阿夫利神社は、古くから上下の信仰をあつめ、とくに江戸時代には夏の二十日間、いわゆる大山詣やまぎでにぎわった。この神社の起源は、古代の山岳信仰より発したものである。神体は大きな自然石であるといわれる。しかも大山信仰は、仏教と習合することによって発展した。大山は真言宗に属して、修験道の淨域となり、中腹に不動堂が建てられたのははじめ、あまたの堂塔が立ち並ぶに至った。

山頂の本社は、石尊大権現と呼ばれた。本地は十一面觀世音菩薩とされた。この社を中心にして、別当八大坊、十一坊そのほかが立ち並ぶ。そして大山ぜんたいが雨降山うこうざん大山寺だいせんじとよばれていたのであった。

江戸の日本橋から大山まで十八里(約七キロ)、歩いて二日の道のりであった。人びとは大山に登って、中腹にある不動堂に詣で、さらに頂上の石尊大権現に達し、授福除災を祈願した。五穀豊饒、商売繁昌、そのほかは何ごとでも、大山の神はかなえてくれる、と信じられていた。六月二十七日の初山はつやまから、七月十七日の盆山ぼんやままで、大山に至る道は、各地からの参詣客で埋まった。

大山を支配したのは、やはり供僧であった。その下に属して、修験があり、神家があった。また師職があった。神家は師職を兼ねていた。師職、すなわち御師は、土地ごとに分担をきめ、それぞれ担当の土地をめぐるには、御札おふだをくばり、大山講の結成をうながした。そして大山詣のときとなれば、人びとは、なじみの御師の家に至って草鞋わらじをぬぎ、御被おびをうける。山に登るにも御師が先導し、護摩ごまも神楽かぐらも、御師の幹旋あつせんに頼ったのであった。

明治元年(一八六八)、神仏分離のあらしは大山をも巻きこむ。不動堂は取り払われて山麓に移され、その他の堂塔も破却された。本社の名称も阿夫利神社に復し、祭神は記紀などの古典に登場する大山おおやま祇命つみとされた。

しかも大山では幕末に及んで、神主や御師たちのなかに、平田神道の門に入り、尊王論を唱える者が少なくなかった。維新